

中曽根外交実りの秋

訪中した二階堂幹事長を迎える胡総書記（本年2月）



鄧—胡体制下の

中国事情

十億の人口を擁する巨大な隣国・中国との関係をなおざりにしては、アジアの安定、ひいては世界の平和に日本が貢献することはできない。胡総書記が西側世界に初めて出るにあたって日本を選んだという事実を尊重し、日中が真の相互理解、相互信頼を強めるために、日中首脳が胸襟を開いて語り合うことが大いに期待される。国際関係が、微妙な情勢になっている今だからこそ、中国のナンバー1・胡総書記の来日を、単なる儀礼外交の域に終わらせたくないものだ。

東京外国語大学教授 中嶋嶺雄

この十一月二十三日から三十日まで、中国共産党の制度上の最高指導者・胡耀邦総書記が政府公賓として来日する。コール西ドイツ首相、レーガン米大統領に次ぐ世界の首脳の来日であり、わが国の国際的なプレゼンティージュの高まりを反映していることはいままでのみ。

首脳外交がたんなる儀式であった時代とは異なっており、今日では二国間あるいは多国間の外交懸案のほとんどが首脳外交によって決着を見られるようになってきているだけに、胡耀邦来日による日中首脳会談は、やはり内容の濃いものであると見てよい。日中平和友好条約の締結から五年を経た今日、日中間には、ソ連にたいする評価という重大問題一つを取りあげてみても、一九七八年当時とは大きく変化した状況が存在する。

当の中国自身も、日中平和友好条約を調印した頃の華国鋒体制の否定のうえに、今日の鄧小平—胡耀邦体制が存立しているのだから、当然、対日姿勢やその世界戦略、そして中国内政それ自身も大きく変わってきている。しかも、この間のそのような変化を担ってきた中国の実質的な最高指導者・鄧小平氏がいまも信頼する人物こそ、胡耀邦総書記な

のであり、胡耀邦氏は華国鋒氏とは違って、鄧小平氏という強力な後楯と党中央書記処や党中央組織部という制度的・組織的な基盤を有しているだけに、わが国の側としては、相手に不足はない。しかも、胡耀邦総書記は、たとえば訪中したシュルツ國務長官やワインバーガー国防長官にもあえて会っていないことと示されるように、どちらかというところ、反米親ソの体質をもつと思われ、「中ソ改善派」の筆頭リーダーとも推察されるだけに、わが国の側としては、早速に胸を開いて質すべき事柄も多いはずである。

それだけに、胡耀邦氏自身についても必要な認識を得ておくべきであろうが、さらに胡耀邦来日の背後にある最近の中国情勢についても冷静に分析し、当面の中国がかかえる問題を掌握しておかねばなるまい。

以下、そのような諸点を検討してみよう。

文革では失脚したが

わが国では一般に未知の存在だった胡耀邦総書記は、中国共産党の外郭団体である新民主主義青年団およびその継承組織である共産主義青年団のリーダーとしてはやくから注目された人材であった。とくに鄧小平氏が一九

五〇年代半ばに党中央書記処で重きをなすようになつてからは、党書記処や党組織部に基盤を置く党官僚としても活躍したが、やがて文革で失脚、「反革命分子」として厳しく断罪された。その胡耀邦氏は、一九七三年の鄧小平復活前後から再び政治の表面に登場しはじめ、とくに毛沢東体制末期には、「四人組」から「三株毒草」と激しく論難された非毛沢東化のための戦略的プログラム、「科学院活動報告要綱」を中心的に起草し、今日の「四つの現代化」政策への基礎を固めた理論家、政策マンとして注目された。こうして鄧小平

氏と一心同体となり、二人三脚を組んで非毛沢東化の道を歩んできたのであるが、文革での失脚、そして復活ののち、一九七六年の天安門事件で鄧小平氏が再失脚するや一時彼も消息を絶ち、まもなく再復活して党中央組織部長、宣伝部長などの要職に就いた。一九七八年末の中国共産党第十一期三中全会では党中央政治局入りしてのち、一九八一年六月の同六中全会で党主席となり、主席制が廃された昨年九月の十二回大会以降は中央総書記として今日にいたっているのである。

ここに見られるように、鄧小平氏とつねに政治上の歩みを共にしてきたことが今日の胡

こうしてマルクス・レーニン主義の原則的な立場に忠実な胡耀邦氏は、訪日の結果、日中両国の、また資本主義と社会主義とのあまりに大きな格差に気づいて反撥し、従来以上にマルクス主義の原則的立場や「社会主義の物質文明と精神文明の優位性」を唱道することになるかもしれない。

しかも今日の中国は、政治的・社会的な非毛沢東化を進め、組織的にも「左」傾分子を厳しく排除する一方、より重要な誤りとして、資本主義思想による汚染を断固取締まるべきことを強調しはじめている。去る十月初旬の中国共産党第十二期二中全会以降は、「整党」運動とともに、そのような「精神汚染」の一掃がひとしきり強調されているのだから、その総元締め立場にある胡耀邦総書記としては、たとえ日本社会の高度な発展に驚嘆し、感銘したとしても、そのようなブルジョア的な自由や民主を許容することなど、絶対にできない立場にあることを忘れてはならない。

果たして、胡耀邦氏の目に、日本はどう映るのか。一連の「日本軍国主義」批判や日本の「右傾化」批判を展開しているのも、胡耀邦指導下の中国共産党であることを想い起こす必要もあろう。

中国の世界戦略の変化

今日の世界が日本と中国だけであり、日中関係が唯一の国際関係であるならば、日中友好・熱烈歓迎のエネルギー交換がいくら過熱しようともかまわない。

だが、いまや世界の経済大国から政治大国への道を歩みつつあるわが国としては、日中関係の過度の緊密化が日ソ関係や中国の周辺諸国を刺激し、その結果、日本外交の選択肢を狭めてしまえばかりか、長期的に見て、わが国の国益を損うことになりかねないことについても、今日のような国際的変動の激しい「新冷戦の時代」には、とくに注意を払ってゆかねばならないであろう。現に、日中平和友好条約締結以来のわが国の国際環境も、ばらデタントへの道のみではなかったことについては、いまさらいうまでもないところである。

一方、中国の側からすれば、毛沢東時代の



文革時代は胡氏も一時失脚したが……

耀邦氏の大きな政治的資産だといえようが、同時に、この点に彼の「限界」を指摘する見方も数多い。

だが、私自身は、中国がいま再び毛沢東型の社会には戻り得ないことからしても、毛沢東型のカリスマ的リーダーシップに変わる今日の官僚的リーダーシップの時代には、まさに有能な党官僚として、「赤い貴族」の独裁体制を担い得る胡耀邦総書記こそ、将来もきわめて有望ではないかと見做している。

当面は、まさにこの冬から三年がかりでいよいよ始まる中国共産党の「整党」運動の帰趨にかかっているといえよう。いわば中国社会の底辺部分から文革派、毛沢東派を根こそぎ追放する狙いをもっている今回の「整党」、つまり鄧小平「胡耀邦時代の「肅清」に成功すれば、胡耀邦氏の立場は、さらに強大なものになるのではなからうか。

初めての西側世界

ところで、そのような胡耀邦総書記は、過去三十年間に、青年友好運動や国際共産主義運動および中国の党・政府代表として、ソ連、東欧諸国やカンボジア、北朝鮮などのアジアの社会主義国をしげしげ訪れている。昨

年四月に鄧小平氏とともに北朝鮮を隠密訪問し、金正日「金正日父子継承体制への」認知を与えたことも記憶に新しいが、本年前半にも、ルーマニアやユーゴスラビアを訪れたばかりである。大変なヘビー・スモーカーの胡耀邦氏は、写真でもわかるように満六十八歳にしては若々しく、冷たい気迫を秘めつつも、極めてエネルギーで、しかも能率的に実務を処理することも知られている。

しかし、アメリカの首脳をはじめとする西側要人との会見の機会ほとんどなく、西側の資本主義国を訪れたことも一度もない。従って、今回の日本訪問は、胡耀邦氏にとって生涯最初の西側諸国訪問になるのだが、それだけに訪日への期待も大きいようであり、ありのままの日本社会の実状を見てほしいと私も切望する。

しかし、訪日の結果、胡耀邦氏が親日的になるとか、日本最良になるとか、さらには日本の経済発展の秘訣を中国の「四つの現代化」のために積極的にとりいれるであろうといった期待は、軽々にもつべきではなからう。

一九一五年に湖南省瀏陽県の貧農の家に生まれ育った胡耀邦氏は、やがて共産主義思想



かつては国境紛争で武力衝突も演じた中ソ両国も最近では協調路線に変わった(一九六九年珍宝島事件の中国軍兵士)



鄧小平氏



華國鋒氏

が、日・米・韓共同の対北朝鮮批判に中国が同調するはずはなく、胡耀邦氏自身、中朝友好を改めて固めた当事者でもあるので、金日成体制を公然と批判することなどはできないであろう。

このように見てくると、今回の胡耀邦来日には、微妙な問題が数多く含まれている。わが国政府・外務省の強い要請で胡耀邦来日が決ったのは、きわめて早い時期だったので、今日の時点は、日中首脳会談にとって、かなり難しい時期になってしまった。

これらの重要な問題を一切避け、ご祝儀外交に倣す方法もあろうが、それではなんのためか胡耀邦来日かわからない。政府・自民党首脳の熟慮を期待したいものである。

胡耀邦来日の厳しい背景

右のような胡耀邦来日をめぐる国際問題もさることながら、中国内政にかんしてもこの秋は重要な結節点であろう。中国共産党の最高指導者が初めて資本主義国を友好訪問しようとしているのに、このころ『人民日報』ほかの中国共産党の論調は、おしなべて資本主義による「精神汚染」の駆除を強調し、思想的・イデオロギー的な引き締めを一斉に推進しはじめた。

文芸界でも「ブルジョア的自由化」傾向が批判されはじめ、日本映画『蒲田行進曲』（松竹作品）が上映中止になったのはまだしも、中国文芸界の大御所で文化官僚として腕をふるって来た周揚・中華全国文芸界連合会主席が社会主義社会での「疎外」を認めたカドで「自己批判」に追いこまれるなど、あたたかも文革初期のような状況を呈しはじめている。また、『毛主席語録』ならぬ『鄧小平文選』の大量刊行や毛沢東長江遊泳写真に酷

似した鄧小平遊泳写真の公表、この八月初旬以来、一万余にもものぼるとさえいわれる犯罪者の見せしめ公開死刑の執行など、最近の中国情勢には、不可解な動きが多く、鄧小平最後の賭けとしての「整党」運動に直面する鄧小平＝胡耀邦体制のあせりと苛立ちも見えかかっている。

このような背景において胡耀邦総書記は来日するのだから、八日間という滞日日程は胡耀邦氏にとってかけがえのない貴重な日々であるはずだ。

同行者には、中国共産党における日中関係の最高責任者とも目される対日工作者、張香山中日友好協会副会長も加わって注目される。同氏は、最近、『北京周報』日本語版二十周年記念に際して、文革期、毛沢東時代のような硬直し閉ざされた日中関係への回帰を示唆するような論文を発表して私の中国評論をも論難している（張香山氏への私の反論は、拙稿「胡耀邦総書記に問う」、『文藝春秋』一九八三年十二月号、参照）。

ともあれ、折角、秋深き日本を訪れるのであるから、どうか胡耀邦総書記一行は中国国内の政治的緊張から暫時解放たれて、大いに寛がれんことを祈念してやまない。

反「覇権主義」一本槍の世界戦略、つまり反ソ主義はいまやすっかり影をひそめてしまった。内政上の非毛沢東化に伴って、当然、中国の世界戦略上の非毛沢東化も進展してきたのである。その結果、今日の中国は、いまや米ソの中間に立つという「独立自主」の立場にあり、「山上から両虎の闘うを見る」（従山上看両虎闘）が今日の中国の原則的立場だといえよう。従って、いまや中国は、ソ連を毛沢東時代、あるいは華国鋒時代のようなかたちで脅威と見做す立場から大きく転じている。このことは、SS20の極東配備にかんしても、中国がさほどソ連の脅威を高唱していないことにも表われている。

昨年後半以来の一連の中ソ和解への歩みは、ここに見たような中国の世界戦略の根本的な転換を背景にしているのであり、まだまだ中ソ接近は緒についたばかりであるので、将来さらに大きな進展が考えられようし、やがては、迫り来る社会主義社会の内在的な危機に当りて、中ソ双方はお互いの共通基盤や相互補完性をより重視し、戦略的にも共通の基盤に立つことになるのではなからうか。

このような中国の最近の世界戦略の変化、さらには中ソ接近への歩みを主導してきたリ

ダーが胡耀邦総書記その人であることも忘れてはなるまい。

最近の中国の一連の対外行動には、すでに中国の世界戦略のそのような変化が色濃く反映されているといえよう。

訪日の今、国際情勢は微妙

いわゆる中ソ接近の問題については、いまはさておくとして（これらの点について詳しくは拙著『中ソ同盟の衝撃』、光文社ハカッパ・ビジネスV、一九八二年、参照）、まず一般的な大韓航空機事件に際しては、七〇年代末にはアフガニスタンへのソ連軍の侵攻に抗議して、中ソ間の事務レベル交渉を大見栄を切ってキャンセルしてみせた中国が、今回は何の抵抗もなく中ソ交渉に応じた。つい最近も北京で中ソ次官級会談を終えたばかりであるが、近い将来は、さらに高位の中ソ首脳会談への道も開かれそうな気配である。そのうえ、KAL事件での国連安保理での決議には、西側諸国あげての対ソ非難にもかかわらず、中国は決議に乗じて西側に同調せず、結局、対ソ非難には加わらなかった。窮地に陥っていたクレムリンが、この中国の態度にいかに満足したかは想像に難くない。

このような中国の姿勢は、十月下旬の米海兵隊によるグレナダ侵攻作戦において、さらに明白であった。中国外務省の齊懷遠・報道局長は、「米軍のグレナダ侵攻はいかなる口実があろうとも、強国が弱国をいじめる、国連憲章と国家関係の基本的原則を著しく破壊する覇権行為である」（十月二十六日）と激しくアメリカを非難し、今回の胡耀邦来日も同行する呉学謙外相は、「米国は中米諸国を恫喝するために軍力を用いてきた。最近グレナダに軍隊を送り、全ラテン・アメリカ諸国の憤りと非難を招いた」（十月三十日）と表明している。

このような中国の立場は、当然、予想され得たことだといえ、中国がアメリカの「覇権行為」を激しく非難するとき、ともに「覇権主義」反対を日中平和友好条約で誓い合ったわが国の立場は、きわめて困難なものになる。ましてやレーガン米大統領を迎えて日米同盟関係を強化したばかりの日本政府が中国の対米非難に同調することなどできるはずがない。

そして、ビルマの対北朝鮮断交をもたらしたラングーンでの韓国関係殺害事件に際して中国は、いまのところ一切沈黙を守っている